

「先生のための学校」誌上 開校

学力研 先生のための学校 校長 久保 齋 2020 4

先生のための学校の校長として、若い先生方に一番に伝えるべきこと、それは「何が自分を変えたのか」ということ、何が僕を学力研の教師に変えていったのか。ということだと思えます。

それをこの誌面を通し、過去の実践を通して何回かで伝えたいと思います。

何が私を変えたのか その1

私を心底「学力研の教師」にしてくれたのは、私が五十歳で赴任した新林の子どもたちでした。当時、子どもたちの荒れやキレが全国的に問題となる中、まさに荒れやキレのど真ん中の学校と行っても過言でない学校でした。

後にNHKの「NHKスペシャル」の取材を受けるのですが、その記者に「この学校の荒れが改善されれば全国の小学校の荒れはなくなる」と言わしめたような状態だ

ったのです。

その荒れた子どもたちが正に僕を心底「学力研の教師」に変えてくれたのです。

僕の中には偏見があつた

僕はそれまでも学力研の実践家として、実践を発表していましたし、それなりのこととはしていたと思います。しかし、新林の状況はそんなに甘くなかったのです。

そこで、僕の選択は2つしかなかったのです。

学力研の考えを信じて「読み書き計算」で子どもをきたえることに徹するか。それとも生徒指導に徹するか。

当時、茶髪、ルーズソックスは非行の代名詞のようなものでしたから、多くの学校、多くの教師はこの改善のために子どもたちの人権も無視して生徒指導を行うことが常となっていたのです。私も茶髪、ルーズソ

ックスはよしとは思っていなかったのですが、そんな偏見を一掃してくれたのが新林の子どもたちとの取り組みでした。

四月新しいクラスを持たれるにあたり、教師自身の中にある間違つた考え方、偏見を打ち破る一助として、新林の実践の中の一文を参考にしてください。

教師の考えを打ち砕くような強烈な子どもに会えることは教師の成長に大きな苦悩ではあるけれど、それを乗り越えた時、大きな糧となると考えます。

以下「学力づくりで子どもが変わる」(子どもの未来社) p57からの引用

茶髪、ルーズソックスそれがどうした

私の学校、教室には茶髪やルーズソックスの子がたくさんいます。赴任したときはとても気になりました。茶髪やルーズソックスと俗にいう非行を結びつけて考えていたからです。しかし、〈読み・書き・計算〉〈話す・聞く〉の力を中心に子どもたちをきたえはじめると、それが誤りであり、偏見であつたことに気づきました。私にとつては、茶髪であろうがルーズソックスだろうが、自分をきたえることに真摯な態度を

示す子はみんないい子なのです。

そんなことに目くじらを立てているより、学校は学力をつけることにもっと専念すべきだと私は考えます。かりに茶髪やルーズソックスの問題を学校の課題、規則違反として扱うとなると、膨大なエネルギーがいるし、内面の自由との関係が生じて結論が出るはずがないのです。そんなことで子どもにいやな思いをさせたり、人権無視がましいの指導をして親とトラブルになったりする必要はまったくないし、それは教師の権能からの逸脱と考えるからです。

教師は教育し、学力をきたえることで子どもたちの人格の完成をめざすのであって、子どもたちの服装や持ち物を指導することで人格の完成をめざすものではありません。ましてやファッション感覚まで言及することとはあつてはならないのです。

くだらないことで子どもとの関係を悪くして、いったいなんの値打ちがあるのでしょうか。教師だつて、「白髪はみつともないから染めたら」とか「はげ頭は教師らしくないからかつらをかぶったら」なんて子どもや親からいわれたら、それだけで人間関

係が悪くなったり一生忘れないほど傷つくでしょう。そして「はげ頭でも教師はできる。ほつといてんか」といい返すでしょう。

口には出さないけれど、子どもも同じ思いをもったり、一生忘れないほど傷を受けているのです。そして茶髪について言及された子は「ほつといてくれ、茶髪でも勉強はできる。何が悪いんや」、きつと心の中でこういい返していることでしょう。

この「〇〇でも教師はできる」「〇〇でも勉強はできる」、これこそが学校の神髄なのではないかと私は思います。

学力研の原点とは何か

私は〈読み・書き・計算〉を徹底してきたえると、学力の基礎を培うだけでなく、子どもたちの学習意欲と自己肯定感を喚起させ、同時に荒れ、キレの問題をも解決できるのではないかとこの仮説を立てて実践に取り組んできました。それは〈読み書き計算〉をきたえることがたんに基礎・基本の技能をつけることにとどまらず、ヒトを人たらしめるのに欠くことのできない営みであると考えているからです。実際、実践的にこの仮説が正しいことに確信をもって

いました。〈読み・書き・計算〉をきたえていくと、子どもたちは自分に自信をもち、落ちついて授業に臨むようになるのです。

私たち教師は、子どもたちの教育を「生活指導」と「授業をとおしての学習指導」と、二元的にとらえがちです。しかし、学校生活の八割は授業です。授業のなかでこそ、子どもたちに自己肯定感を味わわせるべきだし、他者との協力や共感、ちがいを認めて人を大切にするなど市民的道徳を学ばせるべきなのだと考えました。

子どもたちは、訳のわからないことでほめられるのはよしとしません。ほめられるには理由が必要です。努力し成果が得られたときほめられて、はじめて自己肯定感が生まれます。そして、自分の意見をしっかりと述べ、友だちの意見をしっかりと聞き、真剣に学び合うなかで、実感として人を大切にすることを学んでいけるのです。そのためには、授業という場がいちばんふさわしいといえます。授業は、学力を高めるとともに、社会性をも高めていくのです。生徒指導の求めるものすべてを授業は内包しているといってもいいでしょう。